

震災後、映し出されているものとの感触

小川直人氏に聞く

(「ともにあるCinema with Us 2013」コーディネーター)

2011年3月11日、東日本大震災。同年の10月の映画祭で震災特集「ともにある Cinema with Us」(以下、「ともにある」)は急遽組まれた。震災から約2年半の時間が過ぎた今年も前回に引き続き、震災に関連する映画を「ともにある Cinema with Us 2013」として特集する。

映画祭事務局からの相談は「ともにある」を続けたい、そして、「単なる記録ではなく“映画”を見せたい」ということでした。150作品くらい見ましたが、予想以上に「紋切り型」の作品が多くて驚きました。理由として考えられるのは、映像のインパクトだけのものは減って、非常によく取材して構成されている結果、ある主張というのがはっきり出ている作品が多くなったということ。その主張が正しいか正しくないかということは別にして、どうしても「紋切り型」に見えてしまう。実際に被災した土地で生活している人間からすると、もっと多様性があると思っていたので、映画としてある形、ある主張に収まらざるを得ないというのは正直驚きでした。正論だけの特集にするのはいやだなという気持ちがあって、今回選んでいるものはその流れとちょっとずらしているところはあります。

たとえば、『輪廻 逆境の気仙沼高校ダンス部』(宮森庸輔監督)という作品は、女子校生のたわいない会話に聞こえなくもない。でも、いろんな人たちが震災にあっているわけで、そのなかの「いろいろ」な人のなかに、きっとこういった熱心に部活動をしていて、自分たちもそこで被災しながらも、一方でとにかく友達同士でわいわい仲良くやっているみたいなこともある。そういう意味での多様性というか、ドキュメンタリー映画の豊かさは何だろうといったときに、不幸のなかの明るい話というのはなんだけれど、みんなが暗い顔をして懸命にというだけではないのかなと思って選んでいます。

もうちょっと違う感じでは、『還ってきた男—東京から福島 しまわせへの距離』(竹内雅俊監督)の、中年のおじさん

の悲哀。たぶん、自分の人生設計や仕事や家族や仲間に対して曖昧に笑うしかない人もたくさんいるだろうと。人生はそんなに劇的なことばかりではありませんから、はげしく泣いたり怒ったり、何かを成し遂げて朗らかに、というのとは違う方々が圧倒的に多いはず。映画に撮る題材としては微妙な対象なのかもしれないけれど、その微妙な感じもまた一つドキュメンタリーとして描かれるべきことのような気もしています。

今回、15作品を選ぶのは大変悩みました。作品の正しさや正確さではない、何かがあるものを選んだ、としか言いようがない。それが、ドキュメンタリー映画を通じて震災に向き合うときの、ひとつの向き合い方ではないでしょうか。また、ドキュメンタリー映画はマイノリティーに寄り添っているところがあると思うので、「当事者にしかわからないこと」ということは実際にあるかもしれません。けれど、それを越えて映画と向き合う人がいて良いと思います。当事者性の話は、どこか排他的であると思うし。

それに、もしかしたら10年経ったときに出て来る視点や主張もあるでしょう。これまでの映画祭を振り返っても、アジアの政治的な事件や歴史的な出来事に対して、時間を経てからも作品がいまだに作られ続けているように。いつ終わるのかわからないけれども、それくらいの時間を経ないと、落ち着いて何かを映画で表現することができないかもしれない。「ともにある」企画のそもそもの意図として、「続けていく前提で動いていくこと」そのものに期待する、賭けていくしかないところがあると思います。そういう「努め」のようなことを山形として自らに課していく。まだ引き続き探っていかなければならないのが今でしょう。

聞き手=奥山心一朗(本誌編集部)

2013年9月8日、仙台にて収録

※山形国際ドキュメンタリー映画祭では今後、震災に関する映画をアーカイブしていくことを計画している。